群書類從

百冊八下

和書門
類
號 四八五三五
函 二〇七
架 三
冊 五九〇

内閣文庫
和書 類
號 四八五三五
冊 五九〇
函 二三二
架 二

内閣文庫
番號 和 48535
冊數 590 (175)
函號 261 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第二百四十八下　　検校保己一集

和謌部三

續詞花和歌集巻第十一　恋上

女のもとにつかはしける

藤原惟成

うつろひし萩のしたはにおく露とともにきえなむ我涙かな

題しらず

増恵法師

あるぞやはさし人めを思ひ草葉にしげく結ぶ露ハかなしき

内裏百首哥に忍ふる恋の心をよみける

源通親朝臣
いさゝ雅八幡のめくみをうけしかはのこ世の人あまきつる

読人しらず 之高
いかにせむ浅人まて光るうちよ出しと思ふ法のな

覚知法師
伊勢の海と思ひしは海と都の事もゆく人かまさりぬめりさへ
彼中にあまのをりはへ人よつはりきる

能圓法師
あまなつかしとなをしれしかはの世へ水わたりて光を絶
人まよひもひとつ待てまさうえしもつひいさなく

すさみ狐女の手わりのまた世を待ちきるおくよ
かくつ首侍る 藤原伊行
あちきなしさすかも海よさとも盃てよう身にそ絶ゆるあめ

内裏百首に忠恵をよめる 藤原重家朝臣
つらからむ時そあらめ心ひちよ吾くしきそ身まこえとや八

女に待よ初て遣しける 賀茂成助
思ひそといひきかひいあまよさるは謹心へとよえ光ゆきこ法

読人しらず 源明賢朝臣
頼くはあまつ恋をも絶あまりけるも身にものかくいそれなり

藤原季経朝臣

思ひあまり袖にくもるに紫ならぬ色に何とてかくもりけるかな

讃岐

打とけていかなる夜半にまとろみてあふとも人にみえきとや

藤原顕保

志賀のらめやとせし人をも秋雨に揚之て橋成にめぐる

内裏百首歌よみ侍けるにのこりをよみける

源雅重朝臣

我恋は嵐をそよく秋山の水かとも涼しきく経て峯を見る

揚るこそ折にもたとへつゝ成ぬるを結ぶる

御製

人ならみかさよりぬるとみえぬと暁の月こそやなき
舟のうち戯からやりよくはつるとみえつるかな
風にもとくく人の秋あひてそる

藤原経衡

いにしへのかしこき物をたつぬれはたゝ世にかなさるはつる時まで
一説山のよみおきをおもへはたかきけるかきこと
かくてりけるよ越きりとものそしても須さは
世中のはるかのなのあかのくあきもせんかは蘭
と路くゝひつゝけける

藤原隆季

君が代は月日も入ぬる山人のかけし御法の花の深さは

猶かくこそ思ひ知るらめ　平兼盛

皆人の心ひとつの経の雲の上にて見あげ奉るそのかみは

うれしきことも見えて嬉しき　徳大寺左大臣

一めみし人はそれとも見えねども恋しくてのみ過ぎゆくかな

女の袖ひきかくるとも契りて雨を待つらむ

御製

あとのまつかたこそひきかへし行末の松の風に吹かれぬ男子

人の女の数さだめとかきてたのみてなかきもまつらむ

春の山遊ハ峯岡の下にかへりて　未詳

和歌の浦の塩たれあまの漁りすさみし人やかたみ祈らむ

女はかくよつのをしへもたまへられつれ

よき人のみち

見給ふまつりの橋を渡りて立ちかへる末の代々の人はみなまた

許らぬ　菅原雅親

よろこびはむかしも今も我君の御代の中に栄えし数まさる代の雲

源親房

絶えずある人の御代の光のかげにかへるなかぞ

雨ふる日さのひかる人のまつり

堀川右大臣

人しれす我恋わひぬ袖ならてやみこそはてね涙なりけり

堀川中宮の内侍に物いふとききてあはれなりける時きこえけるに　少将藤原義孝

よそにてもきかしとおもふはくれはてぬ我身かはりてあはれなりしさ

題しらす　大納言雅通

よそ人のわか恋しのふなみたかな袖にあまりてもらしかねつゝ

馬内侍

人しれぬ恋のなみたにしほれぬるそてをはぬれきぬとやみむ

前治部卿雅兼

わか恋は涙の人もしらぬまに袖よりさきにかよひそめけり

隆源法師

日数へてもらしかねたる恋のうちもしらぬ袖よりまさる涙の

神祇伯顕仲

物おもふとしらせぬほとのもしほ草ふかきをいとふ袖の浦波

内裏百首歌よみ侍けるに恋の歌とてよめる　藤原重家朝臣

玉藻刈いそをの蜑の袖よりもぬるゝ人をもしらせはや[illegible]

新院へ百首歌たてまつりける時よめる

堀河

菅城乃光よ碑に泊まりや維西人よ多く揺て
たゞよふ人をしらずとやかてこの文をゝ
とくこともなれぬる　皇嘉門院出雲
いかなれはおなしおもひに心をもちて海をこそかはらめ
人に勝れぬらしきあかつきるあしたよき名
我乃身こそまたなきとゝへうきまさる
小野
行りみては我か涙とさへつらんかのみもさぬかなしきなき
堀河院御時艶書哥数上人々によみたくら
よしあしをものもとのきくはつりしはやき

民部卿忠教
つくさは思ひしるらんとせしよりは物にはなの涙なりけるを
逢くし　肥後
いかならぬあかつきよしもかはらぬ憂なきをこそ我か身にはきくか
新院人々に百首めしけるに
堀河
逢事はいつかとみしの待ちくるるほとに心ほかなりにし人の命もたえぬるかなしさ
せうけつこりしは数多と人をいとひてもかなし
乃ちるつけしける
源雅光
よそにもいはむとかくとりめかはゝ云ひ乃ちらしいふそけ

恋乃くるしさとも哉

藤原顕方

わか恋ハ年ふるかひもなかりけりうらやましきハ宇治乃橋守

藤原為真

ちるらしやおもへハかなし世中にこゝろをおもしあらしふくすよ

加賀左衛門

筑波山さしけくとも思ひしを心のまゝにもとふらむ

明光大将乃母言ふにみちのきる人あり

つかハしける

右大将公任

天津星出るあまのかハみつ人の命代ふるかハに月をしらしよ

入道一品宮の女乃前なりけるつかさくに侍ける

とふへくもおもハつれなしけるか

平経章朝臣

雲乃上におもかけしのふかひもなくおもひしられぬ井戸のゆく水

女

ゆふすけ山のはなさきたるを見しかハ月の出るをまたし

あらためてつゝみの心もうつろひにけるかなとおもひける女にをくりける

文のとてかハのもとにつかハしける

左京大夫顕輔

いかにせむおもひそめてもかよふへきあまのいはねもなくてまつ山

題しらす　　　藤原季通朝臣

歎きあまりうき身そ今はなつかしき君ゆへ物を思ふと思へは

百首歌の中に　　新院

恋しなは鳥ともなりて君かすむ宿の梢にねくらさためん

題しらす　　左京大夫顕輔

いさまたなはらと恋ゆるとも絶ゆる恋と思ひしらるゝ身

大納言公実

かるらめしられぬ〓ふもとなき手は我をおもふやはする

大宰帥俊忠

我恋は海士のかるもにみたれつゝかはく時なき波の下草

花園左大臣

便あらは蜑の釣舟ことゝはむ人を恋しとなかきぬと

源頼政

せきとむる波の門の〓〓とも逢よりまさる恋のふちかな

よみ人しらす

瀧津瀬は高にそたつ恋すれは枕にむすふ渡る〓〓

よるかの枕のしたにたつ波もなき浦をこそ思ひやる哉

藤原惟規

逢ふことも我心よりありしかはつらしと思ふ種は無けれは

藤原相保

いかにせむことの葉ならはよひとへにおもひしらるゝ…
平兼盛
ちとせふる色やはかはる紫のねにしみぬらむ…
藤原行宗
なかきよもむすふにたえて恋しさはおもひのほかの…
恋しきをおもひしらせてあかすのみ…
藤原長方
十月ばかりの人のもとにつかはしける
かきくもるよのなかさためなき…
こゝろのまゝにけふはのこれる…

つかはすとて　天台座主忠尋
物いふもかはらぬ人の…
寄草花恋のこゝろを
藤原為真
あふことのかたきにつけて…
法性寺入道前太政大臣家の…
人々よみ侍りけるに
源雅光
…
…　花山院御歌

袖にのみ流るゝ涙の川の我心ゆくらむ渡しの舟まつ
　　　　　　　　　　信実法師
いつはりと浅き思ひ知らは涙ならぬ文とも頼む人そ恋しき

続拾遺和歌集巻第十二　恋中

　　題しらす　　　　　源実基朝臣
忍ひねとたのめるからに流れ出る涙つゝこゝにかゝる袖そぬるゝ
　　　　　　　　　　藤原親継
さのみやハこと葉の末を絶ぬまてはかなき人のなさけ頼まん
　　　　　　　　　　小弁
思ひきや我たのむ人のうきせもや涙に今はひとつなき
あとしらぬ涙の色にそめる
　　　　　　　　　　藤原為氏
ありし世をとふこともなきあめの下人ハ今ハ思ひの種となるかな

忘をもわすれぬものを日かすへて思ふかなしき

祝部成仲

蒼浪のよるとたの光はきみか代にかゝるへきとやおもひそめけむ

新院人々に百首歌めされけるに

大炊御門右大臣

さよ衣霧のへたてにかなしきはなにゝつけてかいとゝ物思ふ

題しらず

讃岐

ゆめぬまと見しもをしきのなかそらにやかて人めをしのふうきなる

藤原長能

けふくれはけふのみよそにいかにせむ明日をたのまぬ人のゆふくれ

人の世にたえてなかれぬわかなみたかな

さうえん

人よりも月を今夜も見るへきにひとりかなしき身をもしるへき

後の朝の心をよみ侍ける

高松院兵衛督

忘られしあふよもつらきちきりにてなにとしれぬ花やかなし

仁和寺宮にて人々後朝恋の歌よみ侍りけるに

つれなさにあさましきをさへ待ちまし

宮こ

明けぬるをたのむ暁よりも文なかりけるを見てしもあはぬ名ををし

新院人々に百首歌めしけるに　堀河

なかゝらむ心もしらす黒髪のみたれてけさは物をこそ思へ

ちきりける人に忍ひてあひて(?)　和泉式部

あ(?)せる文さへ世にむしのみえつゝとならて物をらへ(?)さましき(?)る

題しらす　法性寺入道前太政大臣

朝ことにとけるをうらむ手枕のたゆたに人はかはりこそせす(?)

こひわたるともかわる(?)物をそめけむ女房(?)の人

あさかやまつけしつらみ(?)はれ(?)

大蔵卿匡房

草枕旅ねのとこの秋の夜(?)にひとりねをするひとやなからむ(?)

こゝろあたなるものゝ(?)まちにせよ(?)

藤原正家朝臣

夕暮のかねのひゝきのをとつれにかくそうちなひく秋の(?)ゆふ(?)くれ

ひとりなくあはれをたちかさねても(?)なとかもまたるゝ女きく(?)

ときさへひとりなく女かな(?)

津守国基

あふと我[illegible]あさまて[illegible]
待りし人[illegible]けりよ人に
うつり給く
仁和寺宮
逢こともおもひ[illegible]

題しらず　新少将
おもはすよ[illegible]

大輔
たのめつゝ[illegible]初めなん

俊恵法師
わか[illegible]秋[illegible]萩の葉[illegible]

大宮小侍従
待宵にふけ行鐘の声きけはあかぬ別の鳥はものかは

讃岐
一夜とてよかれし床のさ莚にやかても塵の積りぬるかな

参議範兼
あふ坂の[illegible]

[illegible]部[illegible]
夏[illegible]
をやうゝ待[illegible]
五節乃[illegible]

藤原惟成

きのふこそ秋はいさかれとさしも花あらし成ぬてうら
せ川にかくしもかゝりて又過なりける人をおもひ
そのことゝも

読人しらす

逢みぬる人ことにおもひなしかくいひかけけるあらそれ
わとりぬるけら女に稚人さく此言姉くしき
あひくあしぬまつはしける

藤原実方朝臣

いにしへのかはりもとはるかなる人にもふかくもとけさは遠しき
三百六十首中

菅原輔昭

あさなりありける時にいまはみ人を桃風をはし風流
さきにまかりて女おやかしくわれあひはへりま
かりにたてまつりなすりてつらかりけるよ
はかはかなくかくれぬるかなしきもの

平致盛朝臣

心地やまさりけるおもふにしもかれかくれなるなの夜
はるかなる女に桃しけるさきにかへしてはまさ
かへりたてまつるそれそれもかくれかくかへり
くるまにしやかるにおもしける　中原師尚

いさしらすひとりねさけとのはてぬとみえつゝたのみやおもはん人に
かきくらしひさかたの雨のふるさとはたえてなきこそうきにはありける
そらにゆくも雨よ人のこゝろのあかつきそうれ
きえそくなかれ人よそしあゆのこさたえて
よしさせしそこともあつきそへくるつきの後
ゐるもりふつうきのかゝの人よりきえもなき
契りしそ天川かはりきるに
藤原清輔
むさし野の草のゆかりとききしより見をよてしはつるなき
梅さかよつと人のまちとあるものをれと見し

法のゝしをよみ侍る　大弐三位
露はこれもとゝこれもとのあきのあしたのゆふへのそらや
新しらす　うき人を
わかもの思ひの人のよそにけり　思ひかくらんまつしき
志るかとすまつけくそ　まちとしをもしかよと思へは
つきもちさとれる人のこともあらは法のまちかは
越後
あちきなく思ひのあかの　あはれなる身さきをとひへき
冬夜恋　信都覚雅
唐衣さるさもきぬ夜をかへすにぬる袖はつるみなかし

百首歌中に　新院

あかつきの袖よりさきにおくつゆはたちわかれゆく

道のへの草　大納言公実

いさゝめにあらぬよそめや蓮葉のかはしゝ契の猶ふかき

思ひやる心ばかりはさはらじをなにへだつらん

雲の上に　藤原惟規

夢にだにみえもやするとたのみにて

源重之

まことにはかゝる思ひを人もしらじな

あらしふくまがきのたけのよをへてもかはらぬものは

参川内侍

おもひやれ露の命のしげきよにおくれさきだつ

ためしありとも　前斎院御

あるはなきなきはかずそふよのなかにあはれいつまで

思ひけんあはぬなげきのつもるにも

なをいとゞしく思ひますかな

権中納言亮季行

こぬ人をまつよのつきのかげにもあはれとやみん

ながめにしふるき心のつらさかな

ふかきなさけのあるをしらずや

大納言公実康資王母の許へつかはしける

周防内侍

まてこぬ杣をまきたる今代までまてつくるもの

大納言公実

満塩にまかせとあらそふ蘆の葉の思ひもあへぬ紀のみなと

女のもとにつかはしける

源顕国朝臣

さりともとおもふこゝろもあらばこそ思はん人のなをもたのまめ

女

ひとく

浅からぬ契もなくて人のこゝろは変るぞつらき

堀河院御時百首歌たてまつりける

藤原仲実朝臣

紫の花やしきしまの花さかりかへりてこそは見るべかりけれ

題しらず

大納言経信母

このはらしさのあまたを思ひまつ人のなきたにさそふ風ぞ吹

よみ人しらず

あやなくも人に心をつくしつゝおもふなる人はなからまし

権僧正永縁

よしのやま花ちるさとの春の日はかへるさまたる心地こそすれ

周防内侍

こゝろにもあらでうき世にながらへばこひしかるべきよはの月かな

和泉式部

夢にてもみえもあはしつる暁の恋こそ恋のかきりなりけれ

清少納言

よるはのみあひみしよりのおもひそはさらぬたよりのたえせぬ

菅原為長朝臣

こひわひてねぬ夜の人をそみる月のあはれも今はかはる涙に

人こそ物思ふ床のうき秋の涙はつきせし

せめてはまたもくるしくこひわたるらんひつつ

和泉式部

まちしよにこよひも月の我をそ思ふらめかくれなく知ぬる

菅原為長朝臣

ことのはにまちつる人のまたくにもおもはぬよひの月のあはれさはこよひ

まちわひてねぬ夜の月をもみつるかな

伴師延法師

よそにのみ月の人めもつつまれて

女よりつかはしける

菅原成親

わかれにしその夜の月もなかめつつ

菅原泰俊

昔にのみおもひなれたる世中やあらし

よと我庵まてけふこそはあはれなりつらさよ

宿近きところ猶ふもとひとへたつらさまて

藤原親重

思ひあまり山ほとゝきす猶人なつかしきゆふくれにまちかたき

いくたひもひとりかへるそ我身なる人よ

和泉式部

こゝろともなくひとしれぬ涙もみなそこの淀の淀には

歎から涙

源仲綱

世を捨て我もとをあはれ歳まてこゝろにすみのとものかな

二条太政大臣

悲しきは旅にまかりたる物を我恋をしのふ涙かな

兼好法師

なき人に消えにしもゝの数をおもひなからな

よみ人不知

吹まとふ人をあはれとしらぬ森の木の葉のちるを我

古今雑中物にあり

世中をうしと思ふ物からはなにやとかくかひや

やすらふ

続詞花和歌集巻第十二　恋下

題しらず　　　藤原惟成

世ひとしれぬなきなにたちてあやしやいかゞ物ハ思ひそ

齋院小式部

うちよりも思ひみだるゝかたのなきなくとも人のうきなはゝかりの

参議為通

数ならぬ身しも(?)誰にかつらき思ひやりしつゝよそにハきこえしかりけるハ

掌相

恋しさの家にこもれる涙まてもわかれにし人のかなしかりぬれ

小大君

君ハかく忘れ貝なり我はしもこそ思ひしかなき摘ハつらくいはれし

参河

人まてに涙の袖もくちはてゝ数ならぬ身の恋にまさらぬ

神祇伯顕仲

まくらたにかはしつるよの玉のをのたえぬるほとをせきかねしかな

いぬらふ人にたえしくともをぬよ

大弐三位

うらめしき我かまてにいつまでとつれなくしたる人にたのめし

題しらず　　　藤原実方朝臣

契りおきしたのめし事をいかなるやうにさのみしものを人ハ

相模

春乃夜のうたゝねすらも我ハかり哀にやもの思ひし
かれつゝむかしをあはれとなかめつゝむかしあかしつゝき
こゝろにハいつハりてつかハしける

藤原頼輔

あふ事ハいつとも思ハぬ身にハ誰もさこそあハれなる
かれにしかれとも猶いまはいはしと思ふにかゝる
ちかひもさらに深くあるにもこそあはれとは
はつかハしける

藤原親宗

ゆくすゑをまてとはいはぬものからたのむ人やとなりぬらん(?)

かはりて思ふ中ハかたくもあらましかはとや
待ほとのひとつなかめてハ[illegible]
かハしける

藤原家通朝臣

清くとハ[illegible]
丹後守に侍ける法師[illegible]
つかハしける

藤原兼房朝臣

国(?)[illegible]人のこゝろハたゝ[illegible]夜るの衣
新撰(?)人々に百首のうたよみける時

堀川

[illegible]

帥宮おかくれてのちよみ侍りける　和泉式部

ねさめする身を吹とほす風の音をむかしハ袖のよそにきゝけん

題しらず　従一位宗子

[illegible]

高子

[illegible]

藤原為長母 女イ

[illegible]

越後

[illegible]

和泉式部[illegible]帥宮[illegible]

[illegible]　赤染衛門

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

忠盛朝臣

人[illegible]

備中守仲實朝臣肥後國へくたりて西のはてにはまかるよ
おりひりとくなりにあつまりておりにかくなり侍ける
九月はかりきこよからぬ人のもとにいひつかはしける
つかはしける　攝津とく
数ならぬ身はとふ人のあるかよひても月をかよめてゝに
しかなかりきまれ女のなとあはてゝ人まてしけるおりこ
京よりまうてきかへりても女をとかめてひさしうこりて
給へりきまた八女はにいひつかはしける
忘るなよといひしかとも我をは措の山のたきを
見しら須　藤原為親

身はみえぬ人のつらさに我か身をそおもひやるへき神も
家のうちに我か身をしるもこれはこそ人の知
赤染衛門つらくおもへる人のもとにかはりて
こゝろをもしらぬにかひなくやいひかはしける
大江匡衡朝臣
あまたくる人のとこよ我をそむきてはしめたる
國小あくまつ季行くれ
式部女御
里のかたことめ我身にもたまさかは我身なけれ

題しらす　菅原顕方

うれしきにもうきにもさきにたつ涙はおなしなみたなりけり

菅原孝俊

おきよする波への花のわかさきて人のこゝろにかゝらかけてなかれ

皇后宮権大夫師時

ゆく浪やしのゝ海なるを恨てとせぬはかなきもうつくしかりけり

うれしさはいとゝまさりぬ人そあり

和泉式部

恨むへき心はかりはあるものをなきなたてすとしらすもあらなん

そらしらぬまこと人を

うき人を恨むともなくなかめつゝ我身のうさをいかにせん

能蓮法師

なきさかのかはらなかめて思はさりき

三条院みこの宮と申ける時ひさしくおはしまさゝりけれは

あふさかのわかれ

安法法師女

ふりつもる秋風さそふ萩の葉にさためなき我をとはれて

あひみんと思ふ人のためにおもひもあらすありなん

えまゐりこぬほとを過ぬるやおもふもとの人

元覚法師女

こゝろなきうらみをきかむとおもふなよこゝろあさくもおもはさりけり

国立公文書館 National Archives of Japan

題しらず　　西院皇后宮

わか後もわすれぬ人の類あれはさこそはなけかめおもひ出つゝ
たくひなきもの思ひにもこえてしを待よは見るゆめ

藤原隆忠朝臣

としへにもとはれし出そうきよりもまたつらきはかはらぬ
久しくもとゞめぬおもひいのちともなりぬるかな
待まうけつるもとゝく

安藝

うきみをもいかにつくりて思ひ出む頼むるこそはまことなりけれ
たのひくものゝわかれのなかりせはまたきつらさを

いまはとてたのみしよりもかねてよりもとを
さへやかく涙とぬらすなともしのふかれ

藤原季明

人まちかつるかねはさるへきよひとまよひにみえしも
わすれよとおもはむものをおもひはいかにまちきみ
よひのまにしひと文たにもけふもなき

二条太政大臣

としへにもいかにやわすれおもはむとせしこゝろさへ
まさくもなかりしかひかこそおもひ出
ていはいるまをそけふはなきなをとめる

大江為忠女

年ふれてさくにほひはかはらねとおもかけしるき

よ過てみる花の色もかくむかしの花に猶ひ 如此

川かりし衆れ　関白家舞

忘ては人を忘れぬ心かなさてもつれなきかけもせ

出紙て御覧すれはいと人の見まほしけれ

てをしきことにてさきや侍と思ふ名残は

馬内侍

あく続てけ来ゆるぬ恵物はけるなりてとゆか

むすめなるはらみかなよくへしとのうちに見ゆる人

思ひそめつとおもひよとこそをもへ名續はつけゝ

とふ女はしめ申る　赤染衛門

かへれそといひたつれらたのみ續まちなる海かへさん

右衛門督あるらんいうそ名續は人よりこ来

う申る後の過て見るあり侍名過ははひつる

さしけるに　平義盛朝臣母

かりそはは人のなき河しらしなくやしなは立ち神ゝ　如過名れ

思ひしひ次　権中納言定国

う續のうはきたへ見えの數のは寄りさにきゝ舞は　あれ名遣

舞部女

忍まてつらきには人て後の思ひを付乃折りてかくは出しよ

俊恵法師

おもひ逢搦にわかれて人のぬるかるみは常ととらるの

おの律師俊宗

人々長つる程を今ハ物まてさくらるむとあるにゆ遠さり来ゆ

左大臣家の

身のうき哉出いゆふらこめあの安世六雜四名々々立為へるや

かくう婦ゆうとゆふさうしとさうりに物思ひは

ゐなお乃とふるはりつくすくう侍しとた

たえにい以世ちゆるらしいハりてこあれ乃日

あふひま物ささくつ乃うしまさ歌

小大君

思ひさしや婦らうれまうれ萎の世なくに小家乃人妻とハ

なかゆうとこ山水も以るもは浮よ女し以ひた

まけるま

民部卿伝

山よりの色婦ろさ玉と名絶せ八ウのあ由乃人八以多あ人貴

ゐとあハよりとうまさ為けに得ゑふ浅霧乃

なまる浮あしあ小人以り人つりうしける

和泉式部

以ミのうもおにむ人今もさ思ひさまり妻ふみ程やのとはいろうとよ

かねてよりあきはしらるをこゝろとかす
きみかよろつよのはるとかへさくはなかな
う須まくりさしたのしをみれ
侍従光兼
うらやましみよしのにはるのやまはにかすみもみなと
まくの須あしのかみよろこへ人まよふかへ
しるかおもほえすのかよふものかのつうら
平実重
代まのこゑをとりとひうちたかなひきよ
さうかしらわのるかにと入るなかなとおほしよら

ちとせ乃はしめてさらにまれなれ
高松中方
なつしきもさやかにのさかりにあやめかな
五月五日人につかはしける
よみ人しらす
所乃かはあやめもおもふ梅のかはなのかをと人にまち
四条宰相をとりしこゝろにかけるは
ししさかりのかおもひにおもふらはゆき
こゝろさしかまくらまつにかへかへ
あさかをしとも世の中にはをかるこゝ

五月五日ゑそのねざめやほとゝぎす

蕉翁旅道鈔 下

みしまえよおりたちしところにやあ落ちて深川のねざめも

あさましきよりとりくすりひきかむりとゝめ給へり

ともつくさずもまことに行ふさかえんとこゝろざされ

かやけとさしあひく二ころかのあつてま

う携のはせちりやみまうしまふにけりとゞとゞろ

せまくらふにあまさに詞高人をそのしゆくかさを

きたる人かとくくあおもしとうふかのねよしをそ

ひつきろよをともかにあたりくりやきうける

おちをちしと鐘ひゞくやあさ小ながらしあやうや杉の色

續詞花和歌集巻第十四　別

源道済筑前守になりてくたり侍けるにつかはしける
能因法師
かへりこむほとをもまたぬ命こそ別をしかなしかりけれ

平兼盛駿河守にてくたりけるに
清原元輔
おもひやる心も浪の袖にたちおよはぬ別をもいかにせむ

大弐になりてくたり侍けるにつかはしける
小野宮右大臣
ゆきめくりあはむとおもふ命こそしらぬ別のかなしかりけれ

住よしにまうつる人にかはりてつかはしける
わかれてもおなし都にありなから猶こそまたれかへる日をまつ
前大僧正行尊
おもひやる月のみやこのなかそらに心はとまれ人はかへらし
能因法師
ふるさとを思ひやりつつ秋風にきえなむ露の身をいかにせむ
清家法師
流されける時よめる
枇杷殿皇后宮
みつしほのなかれひるまもあるものを風にまかする別なりけり

陸奥のゝ影季かりの使乃すきをさそくさまけり時
川そうちとあそくきすよ見りて母なくこれかなれく
雑りうりにかをゝいてまりきり成ゝをめよみる

津守国基

あらくれし花もあそも鳴人ことにはゝ花遊にうつる世乃痕り
人の法會をこなふ寺門よ都の国よ侍りける
乃ありなむとすれは皆あらはれけるをしらけるよ

天台座主源心

さゝ雑へてあるくきよすてあはれを見れとことに家をも契りね
つくしかりけるおもこ重への乃からぬとくさくてかり侍

よりあまりふのゆくえとからぬむきぬなまとこそ
きこえぬらまに　女
あはれさへ思ふむ人ははるかにてとめるかり初も初め行
こ成くまりぬ修まはらぬ人は織しとこく

賀茂政平

物まなこむ雑を積みて久しき秋とれ心成を旅乃別かれ
詞らむ

神祇伯顕仲

あきのまはたみるゝ人よ所まもし心々まちと見ちる刊のあはれを数多

僧都覚雅

やとも見えても宿にゝすゝ涙とて末ゝ出るたゝ乃那

源重之

こゝろからうきて人の利まハ秋風にふく波そ立まさりける

十月ばかりに女のもとへつかはしける

橘則長

逢事ハ成行かたの神な月おりしもえたおゐぬるか

あひ見すはさかりのみちはかく水まさるらん

こひけるを月ごろありて人につかはしける

云よこし侍よ　実叡法師

思ひわびよるよるひとり月をのみ光まつ雲ゐにみえしかな

わか人のゆくへはしらて人の心やかはるらん

よみ人しらす

ぬさのはしめさせたひのたかはたさしてもちかふ神にまかせて

筑紫にあるかくくだる資通大弐にことゝ

てかへりきてよみてひとつかはしける

藤原経衡

わか人をしのひてあめのふりしくも我を思はぬよそのまとゐに

なし

前大弐資通

年ごろすみける人のすさめてさはりはべりける

河内国よりのぼりてそのわたりの人のおもひけるにかはりて

時鳥なきてすぎぬる夕ぐれにきくつれなさよ

きゝもしつ　山口重如

山さとのゑにはさく梅か枝の露よりもちる花やちらむ

いつの年ゆく年かへるの守れ乃身さへかはる時も見ゆるらむ

能因法師

よゝをへて栄えかはらぬ酒にひたつ杯のいとまをよ

甚法ちく仲臣あつまりすゝむさくくの酒

かさねかさねて人く結ひて寛下勝ちつとも

猶けりまくらかる　源頼綱

正人のくるしきあはれ人ありにも酒とある花はおくやはあらぬ

見ちのくよ乃きけやく酒ゆきをる時　花水郎下

許よつらしきる　高階經重朝臣

行とみ水にあふせの河川乃ありけをいつかはまよしまさるかと

久し　藤原範永朝臣

君にゆくらふく山川を語へるよ結ひすゝさ我を思へよ

源惟成　しく結ふ語ふ勝ゆくをまとそへて

猶をも志傳團うきる時はくまにおもり

まくとのうけりよそれ双調は滄海波曲

出ふとれあそこう風あしく時よるとりしも

うゆとゆき思へまと花は見よく結ふそれ

前中納言(?)卿

とゝへまかくかくとも我思ふ身はおきつ波よるせぬ
まれしけふあふ乃ちよをかさねむ人もをいく
なみをおもひしる人は

和泉式部

別てのちまかりしやこ小宰相もとにいひつかはしけるやいなや
とりのこゝろ人の京よりのほりけるに思ひおこせて
らひつゝ小侍従のかたへよみてつかはしける
のほりけるにおもひて待人もこそあれなにはなる小まつの
ちるをまて我身さへにおもひやくへきみちとめて
とまて侍なれは

傀儡あこ丸

新院位におはしましける時後合によませ給ひけるに
二条太后宮の式部にいひつかはしけるをつれなくて
くる権中納言なる人あさからぬあひまの事
ゆきけるに川のほとり人まつを
こゑくちをしくよむもとはたつけなき
らへをひくつなつはしき

左京大夫顕輔

あふことはなき身のなからへてや川への人の
ねとは

續詞花和歌集巻第十五　旅

こちかぜにたなびけゆふぐれあまのかはらくこえきぬらむ
つゆけかりけり
橘爲仲朝臣
いつの夜にかはかへりてと思へどもあまの風吹くはるかなる
題しらず
源盛家朝臣
あづまぢをはるかにきて遠き道をすぎしはるかの関
御形宣旨
都出て秋風ぞふく白河の関をこえてゆくかたやあはれなる
津の国の波まよふしほがせにたちゐるあしの葉をわけ
ある人中納言国信をとしくみし旅にて

肥後
草枕かりそめぶしのやどりには雲ゐる峰にさそはれて
しかのねもあはれに聞ゆるはこころちらくこそあれ
なりたる旅人のまつりて侍りけるをききて
旅の空はるかにながめてよめる
ことばにもやまとやまびこになりける
ならひとぞ
源頼政
君すむやまはふかくとも世をなかばすぎてもおもはで
新院人々に百首歌めしけるに

堀川

世のなかはねとおもふ淡路のとなかなる
見まほしきをみけるにもみえず月かな
てらしける　　左京大夫顕輔

色つく旅のよそほふべき雲のうへにもなかるゝ月かな
月なき嵯峨野ゝあきのいろ
藤原基俊

あめふらぬよそにたえす荻おとしてのむらさめにぞむかふ月かな
あきのにいくよさすらふ月のあかきに
登蓮法師

あつきをもひやりけるかむかしはひるにまさる月かな
堀河院御時百首につかふまつりける
大蔵卿匡房

月のすむあかしの浦をながむればしほひのかたにみゆるなみかな
紀伊守にて侍りける時源則家かもとにまかりてや
あきはつるこゝろもなく左伝国にまかりてかへりけるに
ひとよ海にはすゑにけるよ月のあかく侍りけるよ
よみける
高階経重朝臣

あくるとやへのむらさきにかけとかはらぬ月をまつかな
旅宿待月
源頼家朝臣

おほつかな有明の月かけにあかす旅ゝたちゆく山のはとならむ

題しらす　藤原範永朝臣

夏の夜の月もあかさぬ宿のまとゆきゝにやとる逢坂の関

見えぬとやおもふらむを旅ゝにいくあまたゝひあかつきに

月かけをはりしるこゝろもさなかけ

仁和寺宮

東まちのよはの月かけかくらしつゝいてゝやまの端を出つ

新院人々に百首歌めしけるに旅の心を

堀河

みちすから心もそらになかめやる都の山の雲かくれぬる

題しらす　式部大輔資業

あふさかてゆかはくらぬ鳥の関山を越つるにやあまたなりける

屏風歌　大江嘉言

山こえてきく旅ねのいはやかはと山のもとよりゆきかへりなん

ふるさとの人にみせはやあまのかはなみにたちけるかな

さとにこそなけく　橘為仲朝臣

旅ねするとまりさしてみなとたちてる月にあまたたひかけける哉

題しらす　権僧正永縁

白雲のたなひく旅寝もおもひやるにも源さへ山さとよ日をかさねつゝ

よみ人しらす

ところはなのしき杜の嵐こそちらし紅葉は節に流れけり
備中女のもとにまかりけるに時によめる
橘道時
志賀の島にまかりけるに旅にて山のもとにまかりて
わとあかりける所にものけるに旅にてあけかたの山のはのかへりけるに京よ
りあけ侍るをとこかたに待りける清見か
名所にて　法眼明覚
見つくはたてをみよとは尾張の関にもなほまたやむへく
立つつかあるなくにとのまにこそ絶えにとこそ浦まけり
けるかなめ哉

昔にもあらぬ浮世のみやこの里にこそ旅に出てなにこそ
都をばまだ夜をこめて立ちつれど旅はつらしき
藤原俊範朝臣
月をみつつもあかしの浦をこえて行く波にうつりて見え
みよしのの山のかすみよりあかす
源俊頼朝臣
住吉の浦の旅にして雲の紫風にあらため
あらしの吹きしをりつつ雲の絶え間より見ゆる沖つ海
旅宿のこころをよめる
登蓮法師

みさこゐる礒の松か枕にしくれてもやさしくもあらしつゝふく

海路時雨をよみ侍りける

藤原顕広朝臣

舟とむるとまりの浦の波の音に松風そへて遠ふるなり

あかしつるかたはしくもみにけるよ

中納言定頼

あさ川をよふ小夜ちとり難波かた暁かけてさそはれにたつ

まれゆくへほかにとまりさためぬ

旅いと哉り侍るまて

肥後

小夜更てあしの末こす浦風にあはれうちそふ波のおとかな

天王寺へ詣侍りけるに舟にて

月のあかゝりけるによめる

前大僧正行尊

夕されは難波のあしのうき波をかきくらしつゝ鳴て行也

題しらす

山口重如

月影もみなとにちかくなりけれはさゝ波のなみそ入るかゝちかす

たちまよふなにゝよるらん

赤染衛門

おもふことなくてそみましなにはかたのとかにみえし浦風は

難波江へ漕行舟のゆくへをそ

義通朝臣

あきの侍てまかりけるにあつまりてあそひて
なかにもそくいひつかはしけれ
はよみ侍る　能因法師
さすらふる身はいつとなけれとも秋の夜風にものそかなしき
しらぬくさにそく侍らぬよせてあまたのたひ
けるみのくにまかりて大和守やすかね
かりけるのつかさ定義朝臣せうそこして
さけるをなんよみ侍りける
　菅原永実
とふ人もなきやとなれはゆふくれの花のみさやかにふちはかまかな
かし
　菅原定義朝臣
いかなる露のおきけるにやもみちはのいろのこきにかはれる秋かせ
　赤染衛門
ききてさひしきこゝちしけるに
一声てまたいつしかとよのふけて秋のよにまくらにすたく虫のこゑかな
秋はてゝ世人まかりてゆけるよる
　仁和寺宮
あきかせにほころひぬらしふちはかまつゝりさせてふ虫のなくなく
きりやへにたちてかくるゝみちもなく
　前仁和寺宮

定なき浮世中と知ぬれといつくも旅の空をすませ

百首歌の中に　新院

あかすしてもおもひしらるゝ旅寝をこそいつくもかはらぬ旅寝をそ見め

松かせの枕もさえて吹夜はいつこ都の夢とおもひしられ

さらいく

続詞花和歌集巻第十六　雑上

皇嘉門院中宮と申ける時宮の女房と内の
方の女房と歌合あるへしときこえけるに
かよひつゝひとひうちしけるを宮の方の女房
よみつるをおもて後にいひつかはしける

新院御製

久かたの雲井にやまふ月かけもしたにはちかふ光なりけり

清輔朝臣しのひて侍けるに河に通ひけるに
いひやりける

藤原重家朝臣

武蔵野のくさの葉ことにおく露のなくさめかたき世にもあるかな

後一条院春日行幸侍けるにみこしにまゐりて
よつゝをいたきまいらせ給ひて一条院御時
このみゆきありけることなと思ひ出てよみ侍りける
しつかなく

上東門院

みかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとをたつねて

右大将通長春日祭の上卿にてまかりけるに
ともに若宮範綱をともにてまかりけるに
のふなかのもとよりとかめけるを
やよひ又日花縄
なかてさしおもひ出ける

左京大夫顕輔

眺日みしあはれなりけるよそにて見し
平忠盛朝臣六波羅家を新院女房達にみせ
けるはつかしとよりつかはしける

仁和寺一宮母

嵯峨にせさせ給ひける家にてみなかくれけるを
東宮大夫太政大臣家歌合に廬資王母か
ことの音もなくかはりしそむかしなり
きのふとも見えぬはかなきをはかなくよ
なりける

源頼綱朝臣

事へぬるまさのくらと鄣に嘆なかいかゆるさまなり
ける
後拾遺集えらひ侍りける時麗資母よ申さ之字
きゝても志はかりみゆけまたなれをなむなまよすへ
こたのもとゆかしとはかりしける

治部卿通俊

道々を人々ためにかたむ藻塩草たゝとかきあつめたる
すれ
後撰集のいくとせありける時二条よさあかいさ
さ紀乃宮またあまり侍りけるとす人ゝさとを
あつまてとりてなかけるはなに七夕をとゝまくかうて

つかはしける

摂津

思ほくさあはれ沢をちゝもとのうちかくれやまるほ
金葉集えらひめてなむなきなきにけるはみかく
うすにに侍る家数を撰集乃哥人もかゝまて見え
しきまもはなの桜のけるをみなにさまをなく
たまのをまちうなる

従一位宗子

むかしより好のゝ藤の風ありはちゝ千秋の能せはかなん
色し

参河

藤の風あくらとまちしまとの紫式部の乃かをいつくになからむ

二条太后宮にて法ゝまて進りに人のりとふにそ那
むかしへはまつかりしたりきるとおもしくもちひ
きゝこくなつまつきれいそひけりける
拾遺
白露のゆふにむすへる花のえにむすひてもとの人の名乗(?)
卯月乃十日法住寺宗治れいあさき二条院にまうてけるに
意かりとまこと秋なとて袖をふに郭公こえをふかくよ
秋くさの井りかたまとゝまたくへてあくろまれ
まてりをせいさう皮ふにつけすとく
橘俊成
夜さこそ明石のとまりに鵆鳴なりそこくれならぬ夜半の月かな
俊恵法師伏見乃家にて山家眺望といふ
ことをよみける
藤原国房
山賤乃壁間の竹もとへ作ゆるひたちふるきをひきつゝ
堀河院御時百首歌たてまつりける時
修理大夫顕季
梓弓いるおほく草かれてそしらかり人の袖そつゆけき
夜草をよみける
源俊頼朝臣
志ほれのとめ八重の浅茅かすゑのうへ(?)露風の吹ぬを[まよ]
堀河院御時百首につかうまつりけるに

修理大夫顕季

玉藻刈いらこか崎のいはね松いく世まてにか年のへぬらん

二月さらまて梅の花のちらさりけるに

とゝめりし侍らく　よみ人不知

春霞花園山にたなひけは桜ならぬやみ人そみるらん

春ころ僧正行尊ともなひてまかりけるに

すくしつゝけり　僧都正圓

かのくとのこの山の花の春はゝかりの花のちりいまたはなとくに

遠望漁舟心をよめる

皇后宮権大夫師時

浪まより行る小舟のかすみてもみゆるかなたのあまの釣舟

藤原基俊

さゝ浪や志賀の山風ふくらし波まにみゆるあまのつり舟

かつらの橋をよみ侍ける

菅原在重朝臣

絶にける中なる橋は絶なまし橋の名をとふたかき名そみゆる

永命法師

何事もかはりゆく世中にむかしなからの橋柱かな

宇治の八橋を

菅原顕雅

さゝ浪たつれ八橋の橋柱かはらしたえぬものならなくに

題しらす　　大蔵卿経忠

しら雲のあやにやせまし吉野山あらしも渡る花のさかりを

雨後山水といふ事を

芳野川はやせや村雨降ぬらし岩なみたかく音まさるなり

藤原基俊

水風驚夏といへる心を

源俊重

瀧つせに岩波かへる夕風の夏をもしらぬ音のさやけさ

暮望旅客といふ事を

大納言経信

夕日さす浅茅か原に旅人はあはれいつくに宿をかるらん

題しらす　　藤原為経朝臣

ゆふひさす宮この山里の夕ぐれにたつねかねたる

大斎院御歌

おなしやとをせ行とこそのゆふくれ

てらす緑にへたてられゆゑをせき

しらしとまえ山まて

斎院宰相

あしひきのやまひもやますみやこにはふる事のみそかなしかりける

[illegible]院

しらのあしたすゆふへのちのみそやまの[illegible]

八十歳にて待得たるは大僧正親快かゝるためしも
てつからの手よりこそ待きたる人なり

天台座主覚尊

いにしへも今もかはらぬ山のはにおなしかたふく人そあるらん

上東門院見しより絶ぬる附山藤風乃名に
人の数とは松竹なとあるまじうれのまへなり
与えぬへくおもはれ

民部卿範信

篁竹のよゝの契をむすひ初しもつもりて見
緑子松乃末乃下に人にかはるをまつとそ見る

うつろひけるを

中納言定頼

あくかれぬもしらぬ世と松風の吹すさへ人にかはらぬ絶ぬ
人の心とはなけにけりふるさとの水のとにあらず
ありへても見る程に秋のこの夜を鳴き出て
きえにしありひきる

藤原範綱

たなはたの雲のかよひ路ゆかぬ人あまの川原のあつまのさいはひ 沖つ辺
人のあは紙をおくりけるをいかなりけるかへしとく

藤原實方朝臣

かきやりしわか黒髪のみたれぬはこやそのかみのくれなゐのみ
こゝろへし　よそ人しらす

ひさしう人のもとにまかさぬ人の程よりは物ゆかしさにまかりけれとてこれ
うらはれぬむしろおもひかはしきたるあひ世にまかれ
ゆくたまへと人のこひけれは

藤原経衡

やくらしきあつめてよはりし心地にはなくなく月をみるかな
祭主輔親家にて小侍従むかしおもひけれは人々歌よみしに
つかうまつりけるとかはやましくやおもひけむ他
こゝろにも世をあきはてゝ十二月となるかすならぬみをも
かくもてなくはかりはへは
ことさらに思ひのあはれこそにしてみえかしこあふことのやるせ

あさまとうくいくうふうさこつけくるか

祭主輔親

ひとりのみなかめてみれはをくれさしつる風もあてなくと
ゆかしきおもはせなる人女房のつほねにまうて
こゝろくるしきことをなけかしきたいたふむ
せむなきはなけきもいとゝあはれなりける
にまうてゝ

大和宣旨

逢ことを思ひたえにしとはゝつきはてゝゆくめつるかな
山なからそむかさる人ありやそむかはこそ
ひとつくつのたまはかりとはいはしとてもえこそ

さそへとも人も通ハ　祝部成仲

里なれの山ほとゝきすいつる松の宿あれしきとそ思ひける

雨中待客といふ事を　大中臣[illegible]

人ならは待あかしおもふらん心をさそてなかめしつる月夜かな

大納言公実許にまかりて人々對月待客といふ事を

よみ侍ける　源俊頼朝臣

山のはを我もおもひにかくれつる月をまちとはなみのたつや見ましやな

樵路月といふ事を　仁和寺宮

松風のおとさへさひしき暁に月よりあとにかへるきこりやまた人

山月初出といふ事をよみ侍ける

前参議親経

表のはちとせもしらぬすむ月やいつくにかくるらん

題しらす　法性寺入道前太政大臣

あまのはらいつくにすむもかはらぬ月をみん人はこゝろとやみんよ

暁月といふ事を　左京大夫顕輔

こむろ山峯よりいつる月かけのなかはにいりて身をそおもはる

頼経朝臣許にて月の家にあそひけるに人々とや

ひとくもりける　大蔵卿行宗

秋ちかう心我出ぬひき有明の月を待こゝろ哉

三井寺にはるかに白浪くるゝ人の月をみむとて

けるに時人にかはりて世おしこゝろあらむ人はよ

刑部卿範兼

月とおなしきこしかたにもこえし秋の中にかくらかりけり

大宰大弐重家家にて歌合し侍りけるに月をよめる

ゆきてみぬ人のためにとおもひけるまかきの月はあかくすみけり

月おしきまゝにさらにやとかりて侍りけるに

たはふれしける

寂超法師

まちでたる空の月をやとゝめ[illegible]

八月十五夜頼基信桂にまかりておもひとかへる

もせさりきよはつらくもしけるかな

覚盛法師

君待と月をなかめて明ぬ世はたちまちかくおもひ出けり

大殿院一品宮中院にうつり給ける程月

あかき夜春宮大夫師頼母とも申けるに時よ

まちきおもひなく待よはいまはつみても

しらさりし

前斎院中務

池にみなそこしらし月はみえさゝらめなへてをは人

月前待客といふことを

前大僧正覚忠

こよひしもいさよふ月にかたらぬ月はなれこまちいてゝあかしける

山あしに傾けつゝ比月を見るく

源道海

昔にし人を見我もかゝよ照め月を見過にける
こゝろに晴れし人くめつきさくすゆゝ
こめふを待よ人く月お情田といふとを

蓮生法師

まほろしに見し人いまは成はて月を昔に忘れかたみなり
月の迷ひやらん

仁和寺宮

かくれしも見し思ひも嵐よりみえし月いつのよるね
飲よ乃かけは雲に比月を見るく

藤原隆信

なかなかに折しもなき人たのめし月を我くさよ
なかめやいさ

續詞花和歌集巻第十七　雑中

山里に侍けるに紀伊前司なりける人のたつね
まうてこしくおほつかなく浪のたかく見えけれは
まうしとこそ思へりたらんかたのまうてき
ふかきやまにみえたるもろこしのまつ人かく
やありけん

如覚法師

末のよにすみそめて好しき花もなにはにて心もなく浪
無動院のみちをわけてきゆくひとなかりて
さいはひにあるに山吹の花さくときは
さきける

藤原實定朝臣

八重咲く花しもなき山吹のなよたけのよにほとは
筑後守藤通ことにさけるをおくり侍
ことうつらぬかたもなくしけりそやなる

良暹法師

春のさかりこひしくなりにけるかな
津守国基か南のまへにたてすまひ
ふるさとをおもふにもたえぬこころかな
またつくもかけにもかしきもあるかな
なしとふるかなのたえて

津守国基

人心あら浪風のすさふらむ松のちとせはいくよへぬらむ
よるさすきさあらしと絶おもへて新枕かな
めくれはくるまの川ふとゝむともこひつゝそふる
前大納言為家
茂き森の木の下露はそよ小笹の上にもあるはかなき
此のらかはるみよ雨ふりにけるをとなれや
やかてふきさ春の山風のすゝきをもとむるとて
こうけると花の人れしらへるかりのつゆ
るかすもさくりとくりこの雨のなれにし人かり
つきくやまつ　よみ人しらす

花すゝき思ひつくるも結ひ結ふあやなくかはる都の秋
むすめもりしく人志のいとくまたひけるかならすせう
すこしも侍らぬに　清原元輔
思ふ事ひとしく露をはらふも恋すれはこそ袖をしめて秋の空
ひとつ人なりしもこひわれをあまた人のいまそう
かれをあいなくえむしきれて
大江嘉言
すゝきさくらなき物は思ひつゝよなよなかくみえき
とけらも　よみ人も
袖の上日涙の川のなかれとなみたのよなからなうり

かゝる身はたゞ月日のみ清水をとむといかなるらん
うき世にはけふこそ思へとかくらんとおもひけれは女の
かへしにつかはしける女のかへりことにいひつかはしける
きえぬらむ思ひしらさて世の中に我をもこゝろにかけつらくは
ゑのまつかおもひやれ人のかくしつかはしける河せ
さこくしはなからもいつもやとなしゐるなかにのよそ
世にふれは　和泉式部
かくしやなきのふるまはふるさとおもはましよとおもふあはれいかにも
一院ならひにおもしろしけれは時もおはしましけるより
ちよこそ名をそ契りとゆくへとはしらすなるとも女房

待かねとみめてなりときてこそあるらめ女のもとへ
人まかりてまつくしかりけり
前中宮亮季行
みちのくにまかりける人の雲はなれてもいひかはしけるとか
女のもとにまかりけるにまたしもあしくはかなとなりけると
てあはれなりけれは　二条関白前太政大臣
とふ人のゆふくれまてこひわたるゝいつかはかなしくあはれなる
和泉式部か家にいつまてかはかなくおもはぬとけるに
いくしたる枕とあしたそまへきそふつけける
大江公資朝臣

なひくかたさへ浦さし草枕まてこそかへるはしもさへ旅寝

義孝少将臨理乃ときかれかれぬ歎ようるく久之

小まうれわうけるよいさしたる雨ふりけれは

よめる

つらき旅に人いかにもむすひ乃枕にして一夜ねかりを

あはせて夜しらは浪あかてをしむせはいさ大人まこれ

よくしせよといひ侍しをよめる

よみ人しらす

あらしふくたるこゝろのはなのちかひや人にちるまし

源氏乃物語を人にかりてやるとて

藤原顕輔朝臣

わかれゆく袖のぬれまさるらむ旅のそらのこゝろ

かへるにもまつ人もなくにこそかまへてこそかくれ

しるらむとこそみ侍りて倚そこまハ

賀茂政平母

山里の岩ねの水にこゝろみて我にのみとてまねかはかなし

臨時の祭より二宮にまかりて侍りける

前大僧正行尊

昼は旅の雨のふる旅の空のぬれ侍りけるに

物おもひつゝくらすはかなしかりけるを

藤原為任女

たまさかに露てきえなん山里に入ぬ人をいかりやらしやと
おもひやるまことにはおもはゝ人を尋ぬるまてに
とひは物くれなしを　　能因法師

難波江まへを鵜くさつせともたえもうにとなくにかよふな
蘆原基清にかよふるなてあはめつくすまゝしと
すゝけるよつかりしをれ

津守国基

もとらすみの岸の白浪せくるたかとはるゝにとゝまる米
前中宮上総くまのへまうてけるに宿とあらます
うしにかへるきこしにとめまりてさしあゆすゑ
なりをほとつゝりしける

津守景基

せきのあさくらから出てけり住吉の宮にまゐりてさふらふは
前大納言公任なりたりけるみすらけれは十二月に
うたよひつかはしける　　中納言定頼

在つのみこまれ風にそえつゝ吾妻風をおもひしこそやせ
ねし
前大納言公任

吾風の身にしむまゝにみるなのこゑにとをさへやうせ
ねむかしぬりへんすぬかしる代あきにめもりく

よみ侍るか　　源道済

春らく梅こそくさとにほふなれ花咲風をとこしなかる
をやうすくなりぬさとにゆきさく

能因法師

松風のゆくへをのみぞいたしに首うき色にかかる浪の
あかぬまでとも涙にかれ思ひも色をかたりて
人になりぬめしてむなしのなからぬらし
けふなとも我ひとりなかしぬるとまつらなし
ひとりはせし

三条大宮式部

秋くれば萩が花も露におきてまたなれば小萩をきすらん

香宗寺にくらし侍ける　　二宮

いかに人の彩やらゆらと大宮になお法のからはなし
こころをさだめて七条をつくりに光おたかにほうらち
春雨の待てこそはけれり

越後

あかしせにとるとしぬるの西に露のなれそうら
つらかれにも人のむしいきふたりとよりけ
なり

平兼盛

なにゝえの露にも泉ぞむせまでむしにこよるもありや

今葉集にいりてえらはれたるを何代
後拾遺にはくはしくかきあつめたるなと
きこえ侍りけるを
新大将
あさぢふに荒れもはてなむ住む人のあとたえぬれは絶えにけるかな
融院にて月をあはれとみて人々
よみ侍りけるに　藤原実方朝臣
桃園にすみ侍りけるに月のあかく侍りけるをみて
あるじなきやどとはなりてこゝろなきかきねのもとに
恵慶法師
遍照寺に人々まかりてかたらひて花のさかりに
待賢門院におはしまして法金剛院にて
かへりきけるを聞てよみ侍りける
仁和寺宮
春ごとに花のさかりはありなめど逢ひみむことは命なりけり
皇后宮にて侍りけるを
皇后宮かくれさせ給ひての七日
云侍りけるに人々よみ侍りけるに
皇后宮女房

三川秋あしたの空にたつ霧とともにあきの秋のしるし
匡衡朝臣にともなひて後石山へまうでけるに旅にて
山寺の仏前にあそひけるに又ありけるかたはらのもみちをとりてみ
見て　　赤染衛門
紅葉は深山にそ散りのこりけるよりも見えける秋のしるしをり
一条院うせさせ給ひてのちくれける日よめる
つねよりもくもりかちなる
大江匡衡朝臣
萩の花さかりなるにみつる人からなるやとうたひ見やりて
上東門院にて侍りて一条院の匡衡の御書

しくれたに時雨ふりける雨のふるとてき
語らひける人の家に出て人まうてあしたよりてかく
月清かりける夜　赤染衛門
心あらし文に紅葉をきてをかしく
よし
院
うれしさはあまたあれとこそ忘れぬに
大納言公実か家にてよめる
よしあしの事をもみしよりさかりなる
萬園左大臣北方
かきりあらむ世のはてまでもわすれしとおもふ心を
近衛院御時さはりのあるてをりてつけるを

迷ふこそ行末しられ当今御時の又よみよめる迄
ても侍るを太政大臣のもとへいひつかはしける
大僧正光忠
うき身には宿をかすめし名所にて雲ゐの月を猶もみるかな
後冷泉院おはしましけるころ九月十三夜宗
文小御いろへの式部卿宮と殿上人よむへく
わきなむとありく　藤原清家朝臣
秋の夜もすらむ世にや行るかめしへ小野の宿に月をみるかな
みて　式部命婦
雲井よの月の光はかはらねといつも此秋はなとさへかさし

九月十三夜月おもしろく侍りけるを前帥季仲
こともよみしき侍るおとなくうた人とともよみ
へおさめてまきれなるといひつかはしける
藤原基俊
みるらむひとも菅の根の寝ぬ夜かさなる月もくまなく月をみるかな
雲花前人
いく雲ゐへて行らむみなる名たゝ殺衣をきて人や行ぬ
思ひきやこの世にふる月にくもる月をこよ
赤染衛門
おほかたの人にやさとへかへらむの人待てまたく月をこそみれ

題しらす　源頼光朝臣

出家より入にし月をみるならは物思ふ宿のうちもなからむ

於新宮見月傷心といふことを　前大貳高遠

こゝろやはあはれにいかになかめけむ今宵有明の月を涙に

長恨歌の心を　藤原為忠朝臣

まちわひぬ夜はしるらむかけもなき涙にかはる袖とはかりに

陵園妾乃志をよみける　寂蓮法師

松乃戸をさしてかへりし人もなしみるかけもかなしき月をみるかな

とありける返事にかくなむまうしけり　大江[illegible]朝臣

ひるにはよるは

おもひしる人もなきよにすみの江の浪はよるともしらてすくさむ

世のうきこともなつかしきはいまはひとつにしるしなれ　藤原家隆朝臣

おもひやるこゝろもきえてうき人の月にかくるゝおもかけそたつ

よるへなきよのならひにはかなくてあるにもあらぬおもかけのみか

ゆきをきてこそ

日の光てらしすてたるむかしよりみえぬ人をもみるよしもかな

おほやけの御つかひにて下野国にまかりける
ときよめる歌の返し　女のもとへ
藤原成範朝臣
ゆくゑなき旅の空にも東路のたえぬ思ひはありけれは
かへる程をまつとも今(?)はるかなるへし
り一人かはへゆきしものを
前左兵衛督惟方
なのめなるかはしを人をたのむ頃
おのゝ宮のへ河にて御つかひにさし
よの中にありとも何(?)かへりこし

法性寺入道前太政大臣
こひ河乃流れてはやき身なれとも流れて
ねもみえ人のあたりに日人かれ乃ためをさぬ
とくこそまくほしかれ
清原元輔
流れても思ひそめにし袖のぬれけれ
たのむ人のうへもなくとも
たのめつゝかなしくもあるかな
なかの川のせにあさくれなゐの涙
ちのなみたもかくてもあれは

従一位宗子やまひおもくなりにける久しくなりて
いかゞときゝにまかりて侍けるに人まゐり
永福門院内侍
うき雲の秋経とはみえながらかくれはてゝも世にすめる月
まつりの法眼兼昭聖人とむつましく成けるをかくれ侍にける
しけるよかなしく侍りにけるを世にはつかはしける
小大君
たきの糸やみな人の我とひとしくなるらん
長月の清すまひてたのみし人もなく
おほきは世にはくとゞめ人は法にいりけり

藤原基俊
秋かぜの枯野のむしのねたえてはあはれやありしやと人の降
よはらふるあめのくもゐ雲林院なる所にすみける
きゝかはよ人のもとふらひ侍りければ世にはよみ侍
良暹法師
世をそむきて雲林院やしばしは住ともかくれはてぬ
よみ人しらず
たかし
なかにはたゞ世にたゞ住をしはしく山ぞもとめし
あはれいかなるひとのつゆなる法とるを消のこりけむ
とまりし
中納言定頼

たくひなき御世にあへる春なれは清て日影照りまさりけり
すませ

續詞花和歌集巻第十八 雑下

あることありてまかりいてたりけるときてやみにそ
まさにいまりしたひ人なとりひとゝ大僧正行
尊許へつかはしける

源俊重

いかにせむ住吉の浜萩にかくれて思ひぬ秋の波よりたかく
くし

前大僧正行尊

しらさやひをかはる雨きつふ住よしの手意ゝまれとなけひぬを
清輔朝臣上中下をあるへきやりてくほ日へ
きとめ種よさひしくなりゆくをせうへんゆかれ

ぬきとめてむすふ袖の玉をとれとみかぬるらん
とそりせよとたましくて安芸守にてまつり
なりけるにかへしたまへり

御製

院乃おほん時昇殿にゆるされて露の身のうへとたへたくやいとん
こゝろの大内裏をあつかりて御守護ゝかる
にて侍ることあれと殿上をゆるされぬよしをなけき
いへりける人ゆるされぬもとかなしとるさるゝうれ
しく候はゝ行幸ありけることに安芸守へ
申けるか　源頼政

人しれぬ大内山のやまもりはこかくれてのみ月をみるかな

光覚法師維摩会の講師の請をまうしけるに
たひたひもれにけれは法性寺入道前太政大臣に
申ありけるをしめちかはらのと侍ける
とつきのとしも又人のあまたにもれ
よみてつかはしける

藤原基俊

契をきしさせもか露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

僧正義清中きこゆる僧の中より文乃おくれかく
たゝくまほしける

春の日の光にあたりて常よりも花の松にかゝりておいよ成

む月の朔日雪のふりけるに　菅原範永朝臣

春の立しるしはみねにあるを志ら雪の深き峰のみどりそめく

題しらす　源仲正

はかなくて春のそめにぞそめしをぞ人のこゝろのうきにみえ

新院御時うた人のおのおのことにあまたの題を

よませ給ひけるおもひのまゝに

大蔵卿行宗

春日山雲にたなびくさくら花みえそむるより数まさりけり

四月にさけるさくらを見て　法橋忠命

葉隠に又咲花もあるをしれ人まちかねて散ぬとも

人くおもひとのかゞすなよくかへりまし　藤原実綱朝臣

人ごとに花咲春のあそびのを我のみ秋の心ちこそすれ

能乃志門めぐらせしおもひ二なく

人よつかうある　大僧正寛暁

なれ居ゐの見よなる池杜の霧にや宿とあるまじき秋よ

のすゑをかくて山さえり移りける秋こそあはれ

見ぬ人にくゆりなきて有らさりけりよ

よみ人しらす

埋木とおなし沈める人あるを花さきぬらんみちのく
下葛もえいてにけるにけふは法輔卿

住人つかりける　右兵衛督公行

人なくむかしおもはるる雲の上はなかめなけれとのほやさしし菊

題しらす　源仲正

たえぬ思ひをさえいかにせよとかまたれぬおもふすゑをいとふらん

源国能

埋木は花咲事もなかりしにみのなるはてそかなしかりける

身のうさもなくさむる木にありへんとも

かくおもひしなけれとも侍るなる

賀茂成保

殿上はなれ侍りて後思ひあまりて申侍りける

法性寺太政大臣家はまゐりて思ふ山のてらより

侍りける時人にかはりてつかはしける

六位にてつかへ侍りけるとしよめる

源為憲

かくはかりあまりのくもをはなれても思ひつゝかやはらかなる

題しらす

橘毅隆

秋の露けりとめにはむすひをかさねてもあさ霧かゝる
ゑのあひてかけりけるやまひさくれなくさけ山里は
猶ひれどもなる日をはなるゝかすみのあるにおくれ
たゝふかあるにあるまでなきぬとはきらぬ猶あらは

左京大夫顕輔

みなのまへと山城なるしらぬ跡をつきてさらぬとも
うきよにてるゝを待たれれ

源俊頼朝臣

さゝあみのよの神のめぐりも清かにゆふはまのちりけるを波のよせけり
世中はうきよはいかにしもなる人のさすらひ

三条太宮式部

捨果てゝはなきものとおもへとも世にはふる人の心に
後の世をあさましくもはかりけるのちのよのまつらん
先れとわりに後はかりけり

大僧正行尊

春ときめぐくるまにてむかしの人をもはこひもとむ所に
世中はかなくもはかなきもさるかぎりに人なく

菅原為房朝臣

ちりける
あのよにはいつくにかゝる人にそふ
山寺まであるかたの事のわかるゝ

道命法師

都をはうらしとて山に入りしかとせるさこよひふて日と云心
ひさしく成侍りて名つらふ成にけり

源道済

あさと思ふことを忘けるに成るや何乃ころ東道
あふさかの関よりこえてのちの世の猶けりとは
くれる舟もとしもおりりいふ我身にほ
こそとかしきを世ハこのとこてすらそおくしよ

静成法師

深きの沢と河てあぬ身なれたるのうへに立ちかりまれ

傀儡にかはりて　能因法師

いつとても定めぬ物を男なる人の心を富とするものに

甲斐守にて国に侍りける頃光大将の
もとに侍ける人のもとへいひつかはしける

源師頼卿

さくら花ちるをはおもふ人とゝまりけふこそ山風をしのふ之
影しら浪

大蔵卿道家

河それ難波かなたこそまつ白浪あしかりの波よ満るさとて

源雅兼朝臣

舟きはのさをにかへ浮草に徒くしやもたちよる瀬せむ

藤原顕広朝臣

よき人は六歌仙之人なりすゑあるかに皆しれる世
汝乃く小をしへて徒らにあかす未来無辺の行人
いひつかしまき

大江為基

世にくぬをおぬに小やよみかすて世の中をあはれと思ふ心か

少将井尼大京よりいかぬるたよりてきこえける

和泉式部

世の中にむくそこいゆくかなしぬへし大京にて住よかなるこそや

少将井尼

返し

世の中を捨て捨ぬる心のすまかなしいくなかはうきかなしき世

題しらず　よみ人しらず

世を捨て山に入しと後の世をおもひて捨つる
あはれ書物に人心とそとなる飛河せし又
むかしに心成ことはさゝ此法にはすくよみ

賀茂政平

我かむかしまつ先に花のひと騎のさめきと世の中の
新しら世捨て後の世よりも何成き法とよく法
性ある人ぞあなたの大ちよくし物と行とも
よくある

源定信

以とすゑ若き家はさすゑ世のたは此けく世に見えたる世

集の宣旨によりて撰をむこぬところて清かりけり

清原元輔

肥後守にてひとりやまもりてちりをかくしまとふ

右衛門督入道しこふ倫寧の女このゑの

りし人　　　弁宮女房

ふみ人の家むかしあるにて世の中のあはれをしるにて

よそにむかしのことをきくて

けふのかたみとて

中つかさのかりなり

安法

未だその荒れたる宿なりけるを見しにきこえ

世にこもりて後はさてありし人の御あはれ

なりし花のさきたりしを

花山院御時

雑のうたになりて夏のよにむかしの花をみて

よそになりて花を見しに

安法法師

古きあれたるやどにてさびしき

おもひ出てよそのことを

さびしくすむひとのあはれを

赤染衛門

歌よみ人ともおもはれし思ひ出に何の此世のさかり果を
世中をはかなく思ひつゝけて白川に詣けるに
かみちのちりのこそまさりけるとて

藤大納言公任

世にすへき歌やあるまし思ひ出ぬ心も人と書写給ふに

新撰人丸百首よみけるに

前参議親隆

何かとく草葉の露も消ぬるをきえてやと人のからのみ跡
露ちらぬ浪

泊りと

ゐきてたのみに見しに八雲のたなひく谷を我かたの花

源頼家朝臣

見る人もなき歳はまさるへきかなしきれる歌の君かへ

道命法師

み法人ハあまたなく聞わか道をいそきつゝ急さためし人も
ことのあるにおもひをあと聞る人をかへらす
いひつたりけり

賀茂成保

住ところを聞ける川へこそ身のあるハ先立人そ定
きくのこゝろやうすれ行つらむ

如覚法師

世中ハくるしき道はなくてこそはかりもやすきなりけり

新院人〻に百首歌めしけるに

藤原顕廣朝臣

世中を思ひつらねてながむればむなしき空にきゆる白雲

寂然

いつまでか此世の人の小萩とさへん時のまたまの命ぞ

よそにきゝしもはかなくきこえし人をとしをぞ思ふ

人々よみけるに

心覚法師

さのみやはおもひもあへぬ世の中のうきを思ひ種と思ひなすらん

題しらず

花山院御製

ながき世のはてをもしらぬ身にしあればかくて世のことをなげきみるらん

権僧正永縁

おもひよりなにとか世をばなげくらん我がうきことはかりそめの世を

前参議俊憲

あはれなる物とはかねて思へどもうき世のことはいとゞかなしき

新院人々に百首歌めしけるに

参河

かくばかりうきをしのびて有ける身のはかなき世をばいかがたのまん

題しらず

大江嘉言

たらちねのあとこそ絶ぬ世の中を夢もむかしに見ぬ恨は

藤原頼輔

秋そへて思ひそくにも出つれはわか絶世乃身をも聞ゆるくらみむ

小大君

あるかひもなきは数ならぬ世中に恋ふるもそれんとそする哉

大斎院

いまは夏日以聞近れ山乃麓もあひきふ煙とのみやひとはみん

續詞花和哥集巻第十九 物名

はくかむさ　少将藤原義孝

桜さかむ山にさくなひ里ならは海をほせとめよるはひと

野ならの谷の合まきかたにしきとそみる

日向

高砂乃山のさくらは今とへくおなしき立なる色まし

ゑしはく　堀川右大臣

あやしきも風ふきてふくかきしかれはそのもかくるゝ

つくし　よみ人不知

雲のかゝ浦にまつわく波もしかはつとそみのよ海の野せ

名高ゝなかれける　　源俊頼朝臣

おいのなみのよくみせゝおもひなけくにおもかけの
まさしきのなみたるゝてのなこりふるまろ
まもなきかなりそとふきのを難きく人のみ
よゝをともくひかせる

源重之

ちゝやかゝいつのまのこゝろゆゑかのなりをやたちそゐて
あけぬるか　　大弐三位

はるかなる紫も世てをかへきみえく月のまみゆるらむ
わたもるたる　　少大進

月のおもかけは川のやとる秋そみえけるかけのなかたゝ
こゝろかな　　藤原兼長母

秋の野を錦とみえて[illegible]ゆくをいくきしか山もみちはかゝ
かりつくし　　肥後

いけの波のはるゝみそみえてなかもとにもむしのかけにしあるかな
あはれかゝ　　中納言定頼

詠めしてあふさか人もありける涙はいくすかゝる月かな
たゝ川のゝ　　修理大慶

いかなる山ちの秋の寺ありてゝ川のみやしら林をかゝ
ふかき尾とりふみ文字の色のにくこそり　とそ

こゝろあれ

こよひその露ハむすひをきて置かやかにまかせよ　肥後

雑哥

上東門院后宮と申ける時うちの人あまた出つかうまつりて

し侍るに道信朝臣山吹の花をとりてあまたの

みすのうちより月のくまもなき花をさしいれて

哥のかへしをいつれハとくさふらひけるとて侍りける

宮のおもとをしとあつけせハとかくすことを

いひけるか　伊勢大輔

くちなしにちしほやちしほ染てけりこはえもいはぬ花の色かな

つれなく成侍てのちハさらにものもいはさりけるか

女のうらみおこせて侍けれは申つかはしける

藤原実方朝臣

涙河なかるゝと思ふ海の上なるをはらふへきかな

河内守藤原致方かもとにまかりて雪のあしたに

山里の家にまかりてあそひ侍りけるを

申侍るとて道へ出ておもひの袖ハつゝ

よめる

ふるさとにあしたは雪のふかけれはふみ分る人もなし

同日よろしくてけふ夜道信朝臣によくたひ

きこえたる隔と詠める所
藤原実方朝臣
あかるとゐさらの志らたへゆふかけて氏家のなかに絶
いやしけるきくのみもちぞ源朝臣の
あれりしかのひきおほせて末を

源頼成
菊の花に雨のふりけるにたゝみやまのゝ文紙
日吉社の禰宜とかたらひて山に登り法師にて
春とりてかの紙にうへに書つけてまゐらせ
孝善法師

もろともに小野の雪とはしるらむ紙の身の光をかくや増らん
夕くれになりにけりなとまたみむといとらて
頼綱朝臣のかへりにいひつかはしける
藤原伝経
いなり山杉の葉しろく見ゆるはくれはの霜やおくらん
藤原盛房越前のあそむ於て文
日吉社にまゐりてまつるとていへることをもて
そらひつきけれ
ゆくすゑのためしにも見よ人のこの三日の月もかはらぬ
民部卿長家許より殊種をしけるを表遣ったり

ゆきかよひけるに火ともしけるをみてとてよめる
暹律師のもとにつかはしけれは
永源法師
こひしさはおもひとけよ火にてそかはりきえしのねにいるはあまたに
堀川院御時中宮の御方にて人々に恋せさせ給く
蔵人永實をめしてあまたの人に侍るかたはらの
ひをけりと詠みてつかうまつりたりけるをみて
ねきことひとをせむとくくれと周防内侍
かれすみをとゝまりきまほしさをとゝめ
藤原永實

ものやみぬくらんおかしくなるにてきゝかへりこひとけれは
つらきことよりつかたてるあとなりくひと人
けるをみくよみけるをのくかれとせめ
家まてとをせをかへりける
源義光
かへるにもやまとにつくひとを恋ふるなとも
大内のおほせにてれ屋ともせるるとをなむ樹覚法
師かはもとのれすなとつかはしける
快覺法師
おかはさへさ程いかにてもあまのかはらと人へはあまる

前中宮の越後あくるとしなくなりにけり
侍ける比乃あまり雨ふりけれはつかはしける
所知らぬいひかほかなるきえはてゝ
相模法師
将来にはわかれもみなはかなきものを思ひしりて
法性寺入道前太政大臣のかくれさせ給ひての
ちまた
源俊重
夢まほろしのことくはかなきよにはなを人の哀
くるまゝにみちもわかれある山中に
いそかるへきはしるへき
平忠盛朝臣
又の日なにはの山も霞わたりてあさ日の里も霧の絶間
新院の御所にさふらひけるを人々にあはれ
みさせ給ひけるあとをもせしなけれは左京大夫
殿上人にまかりたる人々とゝもにすゝむまれは
かなしかりけれはいとゝ思ひ出られてかなしかりけ
おもひ出るそいひける
前左京大夫顕輔
あさかほの花よりもはかなくて行末のあはれなと
道風のまたとふ人もなくて桜のかけのなみたあ

さけりとみる人の手折る枝のひまもなく
はなぞちる　讀人しらず
桜花あらそふ梅にゆづりてや遅くさかぬを咲もまつ
まちふへぞ

續詞花和歌集巻第二十　戯咲
百首歌中に　新院
子乃日して春の野毎に尋ぬれば松にひかるゝこゝちこそすれ
中務親王の家よりまかりけるに紅梅乃
さかりなりけるをかはしておもひに侍りけるを
見てとこそいひつかはしけれ
ことありてひつかはしける
惟宗經泰
梅の花袖にうつりとする程に春のはじめをまつはなりけり
讀人しらず
賀茂重保

あやなくも風のぬるめる梅のにほひ袖人へうつりけり
花のうちにや宿かしつらん

良暹法師

いかにしても春のなごりはつきもせぬ人やまたまし
散しらぬ

仁和寺宮

新柳のみどりもまさる木柳のいとも梅のはなも
さほ姫のちりてぞみるかきねの花のもとに

源仲正

若草のいつしかはえて花はまたさかでもけふのいかにいはん

仁和寺宮

白河院

春の日はながくはなれておもふ人もあらばと思ひもやりぬ
こぞみしにかはらぬ花のみなこそなかれ

小大君

しかの山ざくらさく日はおなじころなれどうれしかりけり

題しらず

法性寺入道前太政大臣

さくら花のみことも春の月の桜の花

新院へ百首歌めしけるに

小大進

ここのへにとめくる春はなきをみてちるらん物をあはれなるかな

山ふかく心こそく花咲つくしはなかりけり野への
うき世をこそおもふへしとはしく字たにもなき人く
おもひけれはふかくこゝろにすゝしくそおもひ
やられ
信部親族
第九集も侍りけるに入らるへき由うけたまはりて
こゝに法印寺師よりうけ給はれは人の中侍るしけれは
教源律師
乃中にしはおほく式集へ入ぬるをもしるしよしなき女郎花に
こゝもの山里に侍りける女の子にあるにつけて
ちるをみて世は
江侍従

和哥をとゝめたなはゆるねをも心きこえのこゝもおもひ給
一 題しらす
大僧正覚忠
逢たとえかくこそあるする山鳥今はかゝるをそねたかりけり
源親房
古寺のめやあはれむ雲をし流れ桂柱にしまく小田原とそ
生まれてける女房二人ありなからみるとも
ひとつらくもの心ふかゝるひやりなる
法橋忠命
うたは世にはるまたあめにかくれぬをもしられぬうたやらし
題し
女家

おなし程に大臣の家にてさくらの花をおりて女に
雨つもりける女車のうしろにかきておこせける
又あしたにまかりてつかはしける
藤原道信朝臣
いとむすめのとりかへす海よあまねくはかなかりけるをこそおもへ
人のもとにまかりてかくれいひ侍ける
ともせぬよ女かしらる鶯のなきふるさとをとはむや
いひつかはしけるに　右衛門保
たのみても鶯は人をも鶯のこゑとはいへるもなれやなかるらん
あはれとてたかき女をとりしきに侍ける
人のむすめのもとにまかりて後人のもとにはへりける事を
なけきてもなをかりける人のもとに
とうけさるこそ人をきてやあかるむともしりけり
くるみまつむすめのかへりことつかはしてまかりき
てなん鶯にまかりてそなたとかけるとなし
たえてひさしくなりにけり後は
よみ人不知
鶯の鳴きし程よあくかれてなにをとはしまかりけるか
久しくもさともさぬ人より
大輔

契りしハやまはさりかな板庇とのかたに侍りなる哉

新院人々に百首奉りめしけるに

小大進

きみまつと物をこそ思へ夜もすからあかつきまたれかなしかりけり

源俊頼朝臣

多くの人の我をまちぬる夜ころかなやなきひとへきほとの人

さねえ

ありしやとおもかけ思へきこえしやむかしのや

一 六波羅といふ寺の講の導師に侍りけるに

けふの小高座にのほりて極楽の女房のあ

我つくまれはよそになる

良喜法師

一 人のむすめを見そめて知ぬ人のたえすかよひけるをとゝめて

あひ見て後女おとうとにうつろひにけるをくやしと

てつかはしける

大蔵卿

卑撰振舞もなりとていふるさとゆかりさへ名やさ

恵心法師か母の講師にまゐりてよみける

権僧正尋禅

赤人の墓とて此経やまつる人ハ侍りやあらむと

人のおりそこまてりけるをり物かたりけるに

たつねくしに朱のことなるやまうつされて
おもひしうきもの乃にしかす色おもてかふ年
なまよしとおもひかまくら年あり

玄花聖人

春乃かせ風にて見涙くみしけれハ笑はなくもほころひて

新古今

源親房

すみ濁りにけるくもなきこころゆゑ身をまかせてしかなとこそ

こゝろ乃花そ人につらなる涙とも

一

よみ人不知

時しあれハおなしの花もさくらをきかるを松乃ゑ

おそらくはなけれとふとゝの末を思ひさるれ
ようそかれはよみかね

一

少将藤原義孝

ぬし人をはちむち氏ともなも雨宿のかねとてやすらぬ
鶯といふ小鳥は梅をはなそして入のとこ
あけはうかれつるのきれハ

赤染衛門

去年は梅たいともかしこ梅とそあるかそつらに
人のかはらの氏あらしにさきかけもするあか
ありふ十九やれとく

大中臣能宣朝臣

世の人はうきことをこそなけくなれ我はなみたそつらき

さらぬ別の雨たえてこき人のいとをしかり

弟也ふりのなかをかはらて見ても思ひえて

こゝろにもとゝ極りそうり

弁乳母

咲きそふやくらゐありかつ桜花とみなすとはつまにそ

内裏の御屏風にうつしたるかりしつらへ人

一

しらるゝ 大中臣輔親卿

御しぬとゆめの中にのやうなるとはしらぬめかれや

くものうへ大島のまきれなからのとさつけゝり

一

けり寺

松かえに見えくるみたまうにもかくなるにしをとよめや

此うた或人恵慶法師か歌といへり

太神宮にまいりてよみける

増基法師

高山きくかけるをみるとすへしてあまくつるかな

たゝいもいはぬのたはけり女房のもと

たつかぬらうとの御おゝきみとよしたう

まれてあつまかさつきへ出しるとさて

女房

千早振浪の神のいかきも越えぬへしと思ふ程のくれなゐの
流あまる水く國に帰りて月のいかなる人をかえすらん
あめのしたゆるすは我のことそのまゝに人をしらるゝへく海
はりきるゝ世へたえにけり

藤原雅衛

一 雨あらしいかゝをりしのみそきにはおもかけて
かやと流へおとしつまてるきしへあかし人の七
月十五日おもかけのかゝ盆会をなしける代ゝとも

西行法師

一 いつ海におもかけし大あまなたのおもむけみなそ紅葉
をしゐるゆきつゝやめ流とう家あの花に紅を
きて

よみ人しらす

うれつゝもふも雅ちとしかうて流く人へしかけ
時の代織に世へに紅まこと乱くつひ花しられ
まうの海りのくちそうけるか

かくしのやうなるまなそのひとたち人お流くからかおもうそ
ことし

藤原仲実

ふりりさう海なそ流といふよりも夢をも人おちつる花かな
中納言家成家歌合をこ代ゝつ判し

けふまた千のよはひをゆつるとも有まるかつらひ
まうてける　左京大夫顕輔
やまふかくこゝにいはまの松かえのちよやよにまちつけむそとる
済円仲胤　うちのめくさあたりけるとて
えんふをとりいかさくみえんといひけれは源
雅兼信朝臣の須をともに紀雅忠下部つかはして
房にこそちゝたくかへりときてさへつかはし
中に　　僧都仲胤
海山や君かつかへを風なからはいにしへにまたいそかれぬ
よし　　僧範海

風ふかは松にたちよるなへさまに君か代にたのしきとはの色

右續詞花集以織部正乗尹及岸本永暉秘本校正

巻百四十八下

国立公文書館
National Archives of Japan